
彼女の時計は手巻き式

小高まあな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の時計は手巻き式

【Zコード】

Z8746P

【作者名】

小高まあな

【あらすじ】

「私、秒針の音がしない時計って嫌いなんだよね。時を刻む事無く、スムーズに動いて行っちゃうじゃない？なんか、生き急いでいる気がして」

そういうつて笑った彼女は、手巻きの腕時計をしていた。祖母からもらったというその時計は、彼女の亡くなつたあの日から行方不明だ。

テーマ：「音」

「私、秒針の音がしない時計って嫌いなんだよね。時を刻む事無く、スムーズに動いて行っちゃうじゃない？なんか、生き急いでいる気がして」

そういうて笑った彼女は、手巻きの腕時計をしていた。かちかちかちかち。音のする時計。秒針以外にも、歯車の音もある。しつかりと一秒、一秒刻む時計。

音でその存在をアピールする時計。

祖母からもらつたというその時計は、彼女の亡くなつたあの日から行方不明だ。

彼女とは高校のクラスメイトだ。昨年の文化祭の後から、付き合つている。

お互に文化祭の実行委員で気があつたのだ。

とはいっても、お互に部活が休みの時に一緒に帰つたりするぐらいで、どこかに一緒にでかけたのは一度しかない。隣町に出来た映画館に行つただけ。手も握つてない。だって、不純異性交遊は禁止されてるし、校則で。

それでも、僕は彼女のことが好きだ。だからこそ、好きだ。
好きだった。

あの日、雨の日の交差点。夜。酒酔い。タイヤのスリップ。どこまでも揃つた条件。

彼女の家の少し手前で、さよなら、と別れた後だった。
家まで送るとクラスメイトからやいやい言われるのがわかつていつから、僕らはいつも少し前で別れていた。

本当は禁止されてるけど、本屋に寄り道して、のんびりと家に帰ると母が真っ青な顔をしていた。

見てもいなげど、その場にいなかつたけど。
僕は、彼女のお気に入りの赤い傘が空に舞うのを見た気がした。

16歳。彼女の音はもうしない。

「生き急いでいるじゃないか」

写真の彼女を睨みつけた。

クラスメイトの女子が泣いていた。

僕らの関係を知っているクラスメイトは、幸いにも僕をそっとしておいてくれた。

泣けなかつた。どうしても泣けなかつた。

遺影の彼女を睨みつける。

彼女は笑つたままだつた。

彼女のいつもしていた、あの腕時計は行方不明だ。
遺体の損傷も激しくて、現場は荒れていて、どこかに落として紛れてしまつたのだろう。

かちかちかちかち。目を閉じると時計の音が聞こえてくる。僕を責める。泣けない僕を責めたてる。

目を開く。

暗い部屋。天井を睨む。

眠れない。

音を止めないと。探さないと。

事故現場に花を供えて、辺りを探す。

どこかに落ちていかないだろ？が。ビニカにビニカにビニカに。

犯人はすぐに捕まつた。

業務上過失致死罪。実刑でも最大で五年だそうだ。そんなの短い！とクラスメイトは怒つていた。

でも、そんなこと僕にはどうでもいい。

そんなことを怒つても彼女は帰つてこない。せめて、せめて、腕時計は返つてこないだろ？が。

探して探して探して。

見つかなくてため息をつく。

日も暮れかかつて来たし、明日にしようか。そう思つたびにあの音が聞こえる。かちかちかちかち。

諦めきれなくて、また、歩き出す。

なんだか騒々しい音がして、裏路地に田を凝らす。からすの大群がいた。残飯でも漁つているのだろう。

今は関係ないから、と歩き出そうとした僕の耳に小さな鳴き声が聞こえて来た。からすのものではない、弱々しい声。少しだけ近づいてみる。

段ボールに入った、捨て猫がいた。動けない猫に、からすが近づく。

無視をしようかと、思った。

子どもの頃襲われたからからすにはいい思い出がないし、僕は時計をさがしているのだし。

でも、彼女は猫が好きだったのだ。

諦めて上着を脱ぐとそれを振り回しながら、からすに近づく。頭をつつつかれる、痛い。

それでも、脱いだ上着に子猫を抱え込む。あとほっこりから抜け出さなくちゃ。

頭に何か堅いものが当たる。痛い。

それが地面に落ちる。

そのまま放つておこうとしたけれども、なんだか見慣れたものの気がして拾い上げると、ポケットにつっこんで走り出した。腕の中の子猫は鳴かない。

確かに大通りに方に動物病院があつた。そちらに向けて走る。

信号待ちをしながら、ポケットにしまったものをそつと確認する。思った通り、それは彼女の腕時計だつた。赤いベルトが切れている。だから、腕から落ちたのだろう。

どこかのからすが拾つて、それが落ちて来たのだろうか。まったく、どこの安いドラマなのだろう。

彼女の好きな猫を助けたら、彼女の時計が見つかるなんて。『都合主義にも程がある。

僕は生まれ変わりなんか信じないし、そもそも生まれ変わりだとするには日付があわない。でも僕は、この小さな音が聞こえなくなる前に、と病院へ急いだ。

腕時計は、表面に少し傷はあつたものの、巻いたらちゃんと動いた。かちかちかちかち、と音がする。

形見分けとして、もらつた。

「大事にしてね、あの子の分も」

何度も面識がある彼女の母親に言われた。

そこで初めて泣けた。

「大事にします、彼女の分も」

彼女が大事にしていたようにこの時計を、彼女を大事にするようになこの時計を。

かちかちかちかち。僕を責める音はもうしない。

ただ、僕を慰めるかのように音がする。

あのときの子猫は、すくすくと大きくなつて、十五年経つた今も元気だ。今ではすっかりおばあちゃんにやんことして、僕の娘の面倒を見てくれている。やんちゃ盛りの三歳の娘をするのは大変だろうけれども、適度に相手をしてくれるいい子だ。

僕の妻は、針の音がしない時計を好む人だ。あの音が気になるらしい。そこは妙に神経質だけど、基本はおつとりした人だ。ころころと笑う。それでいてとてもタフだ。僕は妻に頭が上がらない。妻は、僕より先に死んだりしない。僕はそう、信じている。腕時計は、何度もベルトを取り替えながら僕の左腕で今日も音を立てている。かちかちかちかち、と。

いずれ、娘に譲りたい、と僕は思つている。

(後書き)

2010年現在、業務上過失致死罪ではなく、自動車運転過失致死罪（刑法211条2項）が成立します。法定刑は7年以下の懲役若しくは禁錮又は100万円以下の罰金になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8746p/>

彼女の時計は手巻き式

2011年1月1日23時25分発行